論　文

女子青年における父親と母親からの影響認知

諸　井　克　英

現代社会学部・社会システム学科

I．問　題

青年期は，それまでの親との関係から友だちとの関係へと対人関係の中心が移行する時期といえる。しかし，親子関係が消失するわけではなく，新たな親子関係が構築されるのである。その意味で，親という「巣」から飛び立つ時期である青年期において，親による影響が青年によってどのように認知されているかは，重要な問題である。

わが国の80年代には「家族の危機」や「家族の崩壊」が唱えられた。山田（2004）によれば，現代家族の変容の本質は，「家族以外のシステムからの自由化」と「家族成員の行動の自由」の2水準から構成される，「個人化」の過程にある。この家族の変容は，近年臨床的問題を超え社会的に問題化するが，若者の「ひきこもり」の常態化と連関する。斎藤（2003）は，「ひきこもり」を，次の2つの特徴から成る状態概念として定義した。①6カ月以上，自宅にひきこもって社会参加しない状態が続いている，②他の精神障害が，その第1の原因としては考えにくい。斎藤によれば，「ひきこもり」は，「社会」，「家族」，および「個人」という3層のシステムそれぞれが互いに接触点をもたない構造を生起させている。つまり山田が言う「個人化」は，若者が家族成員＝親から解放されると同時に，社会による非難的圧力を和らげてくれる家族バッファーという保護膜をつくりあげるのである。逆説的ではあるが，「ひきこもり」現象は，家族という居心地のよい場所の出現を背景にしている。要するに，子どもは親からの影響を子ども自身に都合よく構成していく可能性がある。このように考えると，親子関係に関する心理学的過程の検討は，きわめて重要な作業であるといえよう。

ところで，全国調査（内閣府政策統括官編，2001）を見ると，この時期の若者が営む親子関係心情に関する興味深い構図を読みとることができる。この調査は，9歳から24歳までの男女を対象として全国規模で実施された。「18-21歳」の回答者の親子間の「会話頻度」を見ると，父親よりも母親が会話相手になっており，この傾向は女子のほうが顕著である。「理解度」でも同様の傾向が読みとれる。

全国調査が示すこのような傾向は，わが国の家族関係に関する長田（1987）の指摘と一致している。つまり，わが国の家族関係は，「夫＝会社」と「妻＝子ども」という関係の強化に基づく「夫婦疎遠」と「母子密着」によって特徴づけることができる。

青年期における親子関係は，親が子どもにどのような関わりをもつかという養育態度の観点や，Bowlby（1969）によって提起された愛着理論の枠組みの中で，研究されている（諸井，2002；諸井，2004a参照）。

たとえば，小野寺（1993）は，「養育態度」の観点に基づき子ども（日本と米国の男女大学生）の側からの親子関係の認知を問題にした。父親と母親に対する関係認知が，いずれでも「情緒的結びつき」と「統制」の2側面から成ることを確認したうえで，それらの強さの比較を行った。まず，日本人の場合には，「統制」の点では男女差はないのに，「情緒的結びつき」では，父親や母親のいずれに対しても，男子の評価が低い傾向が認められた。また，日米比較では，日本人学生が米国人学生よりも父親や母親を「統制」的であると見なす傾向があった。

ところで，今井（1986）は，社会的影響という観点から親子関係における子どもの側の認知を取り扱っている。その際，彼は，French & Raven（1960）の「社会的勢力（social power）」概念に依拠した。「社会的勢力」とは，ある事柄に関して一方が他方に影響をおよぼし得る最大潜在能力である。これは，French & Raven によると，次の5側面から成る。①「賞（reward）」勢力〈相手が自分に報酬をもたらす能力をもつという認知〉，②「罰（coercive）」勢力〈相手が自分に罰を加える能力をもつという認知〉，③「正当（legitimate）」勢力〈自分の行動を規制する正当な権利を相手がもっているという認知〉，④「参

How do Female Adolescents Perceive the Social Power of Their Parents?

照（referent）」勢力〈相手に対する同一視〉，⑤「専門（expert）」勢力〈相手が特殊な知識をもつとか，専門家であるという認知〉。

社会的影響関係に関する先行研究での成果を概観した上で，今井（1986）は，French & Raven（1960）の5側面に「魅力」勢力を加えた。大学生を被影響者，その両親を影響者とする「社会的勢力基盤勢力」尺度が作成され，男女大学生に実施された。因子分析によって，「参照-専門勢力」，「賞-罰勢力」，「魅力勢力」が抽出された。被験者の性別や父親と母親による因子構造の差異は見られなかった。勢力認知と親からの影響受容との関連を検討すると，「参照-専門勢力」と「魅力勢力」の有意な肯定的影響が認められたが，「賞-罰勢力」は有意な効果を示さなかった。

ところで，親との関係経験と恋愛観の関係を検討した諸井（2004a）では，親との関係経験に関する因子間の関係を探ると，関係経験の対象（父親，母親）を示す2次元とともに，父親と母親両方による「統制」を表す次元が抽出された。したがって，先述した全国調査（内閣府政策統括官編，2001）の傾向なども前提にすると，影響の源泉（父親，母親）による因子構造上の差異を認めなかった今井（1986）の知見は再検討すべきである。これを本研究の主目的とする。

本研究では，今井（1986）が作成した尺度を用い，父親と母親それぞれからの影響認知を測定し，それぞれの因子構造を検討する。その上で，父親からの影響認知と母親からの影響認知との関連を調べる。なお，本研究では女子大学生を対象として質問紙調査を行った。相対的に親子関係が密であるという点から（内閣府政策統括官編，2001），女子青年における影響認知の構造を探ることが有意味と思われたからである。

Ⅱ．方　　法

調査対象および調査の実施

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用して，『日常生活』調査の名目で質問紙調査を実施した（2003年9月29・30日）。なお，回答の匿名性を確保した。青年期の範囲を逸脱している者（25歳以上）を除き，後述する尺度すべてに完全回答した女子学生210名を分析対象とした。つまり，調査時点で父親と母親の両方がいる者が対象である（平均年齢：19.82歳〈SD = .73，19～23歳〉）。

質問紙の構成

質問紙は，被験者の基本的属性に関する質問群と，父親と母親からの影響認知尺度から構成されている。

父親・母親からの影響認知尺度

被験者が日常生活の中で，父親と母親それぞれからどのように影響を感じているかを測定した。このために，今井（1986）が作成した「社会的勢力測定基盤」尺度を利用した。この尺度は，社会的勢力概念を提起したFrench & Raven（1960）の考えに基づき作成されたが，「賞」，「罰」，「正当」，「参照」，「専門」の5つの勢力に，「魅力」勢力が加えられた。本研究では，この26項目尺度を用いた（Table 2-a，2-b参照）。

父親と母親からの影響について別々に評定させるようにした。この6カ月間，家庭の中で，被験者が父親〈母親〉とどのように接しているかを思い出させ，26項目それぞれで表されている事柄にあてはまる程度を4点尺度で回答させた（「4．かなりあてはまる」～「1．ほとんどあてはまらない」）。なお，「死別や離別などのために」に該当する親がいない者は，関連する回答部分を飛ばすように教示した。

なお，項目の配列順効果を相殺するために，項目順を変えた対父親尺度と対母親尺度を作成し，さらにそれぞれの尺度で項目順の異なる2タイプの質問紙を使用した。また，被験者の半数には父親の影響を先に評定させ，残りには母親の影響を先に尋ねた。

Ⅲ．結　　果

父親と母親からの影響認知尺度の検討

1．父親と母親からの影響認知の比較

本研究では，父親と母親それぞれについての影響認知を測定した。ここでは，各項目ごとに父親と母親の影響認知をt検定によって比較した。5％水準で有意差が認められた項目を今井（1986）の項目設定に従ってTable 1に示した。

「参照」，「専門」，および「魅力」の3勢力では，父親に比べて母親の影響のほうが強く認知されている。「賞」と「罰」とでは両方向の差異が見られた。しかし「罰」については，父親の影響のほうが強く認知されているといえよう。

Table 1　父親勢力認知と母親勢力認知の比較－項目水準での t 検定の結果－

〔参照〕
［母親＞父親］
mo 6　私は，母親のようなものの見方・考え方・性格などを身につけたい。
mo12　私は，母親のような人物になりたい。
mo15　母親のように物事を判断すれば，まず間違いない。
mo25　私は，自分で判断をするとき，母親ならどうするかを考える。

〔専門〕
［母親＞父親］
mo 9　母親は，私にとっていわば「人生の師」である。
mo17　自分でどうしたらいいかわからない場合，母親に相談すればすばらしい解決方法が見つかる。

〔罰〕
［父親＞母親］
fa 2　私が父親のアドバイスや指示などに従わない場合，必要であっても父親は私によい知恵を貸してくれない。
fa10　私が父親のアドバイスや指示などに従わない場合，たとえ私が困っていても父親は私のことを親身になって心配してくれない。
fa19　父親が精神的・物質的に私を脅そうとしなければ，私は父親のアドバイスや指示などには従わない。
［母親＞父親］
mo16　私が母親のアドバイスや指示などに従わないと，母親は怒りだす。

〔賞〕
［父親＞母親］
fa13　私が父親のアドバイスや指示などに従うと，父親は上機嫌になる。
［母親＞父親］
mo21　母親が私の望みを受け入れてくれそうなときだけ，私は母親のアドバイスや指示などに従う。

〔魅力〕
［母親＞父親］
mo 1　私は，母親から好かれたい。
mo19　私は，母親が好きである。
mo26　私は，母親との間に良い人間関係をもちたい。

t 検定で有意差（5％水準）が認められた項目を示した。
fa：対父親用項目；mo：対母親用項目

2．因子分析

父親と母親からの影響認知の基本的構造を検討するために，それぞれの尺度で因子分析（主因子法，プロマックス回転〈$k=3$〉）を行った。まず，項目平均値の偏り（$1.5<m<3.5$）と標準偏差値（$SD>.60$）のチェックを行い，不適切な項目を除去した。次に，残りの項目を対象に因子分析を行った。

初期因子固有値≧1.000を満たす解をすべて求め，プロマックス回転後の負荷量｜.400｜を基準に妥当な因子解を決定した。①特定因子の負荷量が十分に大きく（≧｜.400｜），②他因子への負荷が小さい（＜｜.400｜）という基準に一致しない項目を除き再度分析を行い，明確な負荷量パターンが得られるまで，このことを繰り返した。最終的には，各因子分析で回帰法によって因子得点を算出した。

(1)　父親からの影響認知

項目水準の検討では，4項目が不適切であった。残りの22項目を対象として，2～4因子解を求めた。抽出因子が解釈可能で同一因子への負荷が比較的明確であった3因子解を採用した。最終的な因子分析の結果を Table 2-a に示す。

今井（1986）による項目設定に基づき，各因子を解釈する。第Ⅰ因子は，「参照」と「専門」の項目の負荷が高いので，「参照・専門」と命名した。第Ⅱ因子に大きな負荷

Table 2-a　父親の勢力認知に関する因子分析（主因子法，プロマックス回転〈k=3〉）の結果：プロマックス回転後の因子負荷量

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
〔参照・専門〕				
18	父親のように物事を判断すれば，まず間違いない。〈参照〉	**.820**	−.013	.139
16	自分でどうしたらいいかわからない場合，父親に相談すればすばらしい解決方法が見つかる。〈専門〉	**.783**	−.020	−.010
22	父親と話をすると，父親はなんて頭がいいのだろうと感心する。〈専門〉	**.744**	.058	.001
8	私は，父親のような人物になりたい。〈参照〉	**.730**	.108	−.012
1	私は，父親のようなものの見方・考え方・性格などを身につけたい。〈参照〉	**.707**	.052	−.104
12	父親と話をするたびに，私は父親から何らかの知識や知恵を得ている。〈専門〉	**.703**	.039	−.023
3	父親は，人生の機微（微妙なことがら）に通じている。〈専門〉	**.583**	−.001	−.010
11	父親は，私にとっていわば「人生の師」である。〈専門〉	**.565**	.327	.061
〔魅力・正当〕				
6	私は，父親から好かれたい。〈魅力〉	.023	**.812**	.063
26	私は，父親とけんかをしたくない。〈魅力〉	−.101	**.694**	.016
14	私は，父親が好きである。〈魅力〉	.141	**.627**	−.101
15	息子（娘）である私が，父親のアドバイスや指示などに従うのは当然である。〈正当〉	.185	**.564**	.171
7	私にとって，目上にあたる父親のアドバイスや指示などには，耳を貸すべきである。〈正当〉	.338	**.488**	.058
24	父親には，私に対してとやかく言う資格はない。〈正当〉	.165	**−.461**	.084
4	たとえ父親であっても私の考えや生き方に注文をつけるべきではない。〈正当〉	−.119	**−.427**	.159
〔賞・罰〕				
25	父親が私の望みを受け入れてくれそうなときだけ，私は父親のアドバイスや指示などに従う。〈賞〉	−.157	.040	**.678**
17	私が父親のアドバイスや指示などに従わないと，父親は怒りだす。〈罰〉	.135	−.129	**.564**
13	私が父親のアドバイスや指示などに従うと，父親は上機嫌になる。〈賞〉	.062	.192	**.511**
5	父親が私の望みをかなえてくれないなら，私は父親のアドバイスや指示などには従わない。〈賞〉	−.154	−.278	**.447**
〔因子間相関〕	Ⅰ	1.000	.665	−.229
	Ⅱ		1.000	−.196

〔残余項目〕

2　私が父親のアドバイスや指示などに従わない場合，必要であっても父親は私によい知恵を貸してくれない。〈罰〉
9　私が父親のアドバイスや指示などに従うのは，父親が精神的・物質的に私を攻撃するのを避けるためである。〈罰〉a
10　私が父親のアドバイスや指示などに従わない場合，たとえ私が困っていても父親は私のことを親身になって心配してくれない。〈罰〉a
19　父親が精神的・物質的に私を脅そうとしなければ，私は父親のアドバイスや指示などには従わない。〈罰〉
20　私は，父親との間に良い人間関係をもちたい。〈魅力〉b
21　私は，自分で判断をするとき，父親ならどうするかを考える。〈参照〉
23　私が父親のアドバイスや指示などに従わないと，私が金銭的に困っていても父親はこづかい以外の金銭を私にくれない。〈罰〉a

N=210
初期因子固有値≧1.345; 初期説明率:58.17%
〈　〉：今井（1986）による分類
項目水準での検討の結果，予め分析から除去した項目：a［平均値≒1.50］；b［平均値≒3.50］

を見せた項目は，「魅力」と「正当」を表しており，この因子は「魅力・正当」と名づけた。第Ⅲ因子は，「賞」と「罰」の項目の負荷が高く，「賞・罰」とした。

(2)　母親からの影響認知

事前分析では，9項目で平均値の偏りが認められた。残りの17項目を対象として，2～5因子解を求めた。抽出因子が解釈可能で同一因子への負荷が比較的明確であった3因子解を採用した。最終的な因子分析の結果をTable 2-bに示す。

「参照」と「専門」の項目の負荷が高い第Ⅰ因子は，「参照・専門」と呼ぶ。第Ⅱ因子は，「正当」項目だけが大きな負荷を見せたので，「正当」とした。第Ⅲ因子は，「賞」と「罰」の項目の負荷が高いので，「賞・罰」と名づけた。

3．高次構造探索のための主成分分析

先の父親と母親それぞれに関する影響認知に関する因子分析で得られた6個の因子得点を対象として，主成分分析（プロマックス回転〈k=3〉）を行った。明確な主成分負荷量パターンが見られる3主成分解と2主成分解が抽出で

Table 2-b　母親の勢力認知に関する因子分析（主因子法，プロマックス回転〈$k=3$〉）の結果：プロマックス回転後の因子負荷量

		I	II	III
〔参照・専門〕				
9	母親は，私にとっていわば「人生の師」である。〈*専門*〉	**.788**	.019	−.015
6	私は，母親のようなものの見方・考え方・性格などを身につけたい。〈*参照*〉	**.772**	−.071	−.122
8	母親と話をするたびに，私は母親から何らかの知識や知恵を得ている。〈*専門*〉	**.759**	−.044	−.038
24	母親と話をすると，母親はなんて頭がいいのだろうと感心する。〈*専門*〉	**.748**	−.151	.015
12	私は，母親のような人物になりたい。〈*参照*〉	**.665**	.155	−.113
15	母親のように物事を判断すれば，まず間違いない。〈*参照*〉	**.561**	.190	−.011
4	母親は，人生の機微（微妙なことがら）に通じている。〈*専門*〉	**.533**	−.018	−.007
17	自分でどうしたらいいかわからない場合，母親に相談すればすばらしい解決方法が見つかる。〈*専門*〉	**.504**	.284	−.033
25	私は，自分で判断をするとき，母親ならどうするかを考える。〈*参照*〉	**.445**	.128	.356
〔正当〕				
22	母親には，私に対してとやかく言う資格はない。〈*正当*〉	.143	**−.750**	.156
3	たとえ母親であっても私の考えや生き方に注文をつけるべきではない。〈*正当*〉	−.041	**−.611**	.196
18	息子（娘）である私が，母親のアドバイスや指示などに従うのは当然である。〈*正当*〉	.082	**.540**	.328
13	私にとって，目上にあたる母親のアドバイスや指示などには，耳を貸すべきである。〈*正当*〉	.341	**.529**	.138
〔賞・罰〕				
7	私が母親のアドバイスや指示などに従うと，母親は上機嫌になる。〈*賞*〉	.008	.153	**.623**
16	私が母親のアドバイスや指示などに従わないと，母親は怒りだす。〈*罰*〉	−.146	.031	**.562**
2	母親が私の望みをかなえてくれないなら，私は母親のアドバイスや指示などには従わない。〈*賞*〉	−.008	−.366	**.512**
21	母親が私の望みを受け入れてくれそうなときだけ，私は母親のアドバイスや指示などに従う。〈*賞*〉	.028	−.277	**.494**
〔因子間相関〕	I	1.000	.523	−.128
	II		1.000	−.203

〔残余項目〕

1　私は，母親から好かれたい。〈*魅力*〉c
5　私が母親のアドバイスや指示などに従わない場合，必要であっても母親は私によい知恵を貸してくれない。〈*罰*〉b
10　私が母親のアドバイスや指示などに従わない場合，たとえ私が困っていても母親は私のことを親身になって心配してくれない。〈*罰*〉a
11　私が母親のアドバイスや指示などに従うのは，母親が精神的・物質的に私を攻撃するのを避けるためである。〈*罰*〉b
14　母親が精神的・物質的に私を脅そうとしなければ，私は母親のアドバイスや指示などには従わない。〈*罰*〉b
19　私は，母親が好きである。〈*魅力*〉d
20　私は，母親とけんかをしたくない。〈*魅力*〉c
23　私が母親のアドバイスや指示などに従わないと，私が金銭的に困っていても母親はこづかい以外の金銭を私にくれない。〈*罰*〉b
26　私は，母親との間に良い人間関係をもちたい。〈*魅力*〉d

$N=210$
初期因子固有値≧1.488；初期説明率：56.22%
〈　〉：今井（1986）による分類
項目水準での検討の結果，予め分析から除去した項目：a［平均値<1.50］；b［平均値≒1.50］
c［平均値≒3.50］；d［平均値>3.50］

きた。これらをTable 3に示す。

3主成分解では，父親と母親それぞれに対する『敬意』を表す第Ⅰ主成分と第Ⅲ主成分が独立して現れた。第Ⅱ主成分は，父親と母親双方が発する賞罰的態度である『畏怖』を示す。また，2主成分解は，父親と母親それぞれに対する『敬意』が一体であることを示す第Ⅰ主成分と，両親に対する『畏怖』である第Ⅱ主成分から構成される。

Ⅳ．考　察

本研究の主目的は，父親と母親からの影響認知に関する心理学的構造の検討であった。この目的のために，今井（1986）による「社会的勢力測定基盤」尺度を利用した。今井は，男女大学生を対象として，因子分析によって3因子（「参照-専門勢力」，「賞-罰勢力」，「魅力勢力」）を抽出した。被験者の性別や父親と母親による差異は認められなかった。女子大学生を対象とした本研究では，影響源によ

Table 3　両親の勢力認知に関する主成分分析（プロマックス回転〈k=3〉）の結果：プロマックス回転後の主成分負荷量

	〈3主成分解〉				〈2主成分解〉	
	I	II	III		I	II
父親_参照・専門	.931	−.006	−.022	父親_魅力・正当	.826	−.012
父親_魅力・正当	.921	.032	.066	母親_正当	.795	−.062
母親_賞・罰	.152	.910	−.141	父親_参照・専門	.765	−.055
父親_賞・罰	−.147	.885	.141	母親_参照・専門	.683	.126
母親_参照・専門	−.087	.065	.964	父親_賞・罰	−.006	.901
母親_正当性	.232	−.094	.766	母親_賞・罰	.024	.895
［主成分間相関］ I		−.248	.324	I		−.276
II			−.189			

N=210
各因子得点
3主成分解：初期主成分固有値≧1.068；初期説明率：84.54%
2主成分解：初期主成分固有値≧1.346；初期説明率：66.74%

る因子構造の差異が現れた。つまり，父親からの影響については「参照・専門」，「魅力・正当」，「賞・罰」，母親からの影響の場合には「参照・専門」，「正当」，「賞・罰」という，3因子がそれぞれ得られた。

「賞・罰」因子が影響源にかかわらず共通に抽出されたことは，今井（1986）の結果と一致する。しかし，French & Raven（1960）が提唱した5つの勢力のうち「正当」，「参照」，および「専門」と，今井が新たに加えた「魅力」については，本研究と今井による結果とは異なる。本研究の父親および母親いずれの場合も，「参照」と「専門」は，区別されずひとまとまりの認知となった。しかし，「正当」は，母親では独立した因子を構成するのに対して，父親の場合には「魅力」と合わさって独立した因子を形成する。

本研究でのこの差異は，次のことを意味する。女子青年は，自分と同性である母親が自分の行動を規制する正当な権利をもつかどうかは母親自体に対する魅力に関わりなく認知する。しかし，父親については，父親自体に対して魅力を感じるかどうかが連動して正当性の認知をもたらすのである。

先述したように，諸井（2004a）は，親との関係経験に関する因子間の関係を調べ，関係経験の対象（父親，母親）を示す2次元とともに，父親と母親両方による「統制」を表す次元を得た。本研究でも，父親と母親それぞれに関する影響認知の因子得点を対象に主成分分析を試みると，影響源（父親，母親）によって区別される『敬意』に加え，影響源が一体となった賞罰的態度を表す『畏怖』が現れた。本研究の結果は，諸井（2004a）が得た知見に対応している。

今回の研究では，影響源の対象によって異なる因子構造が見いだされたので，特定因子について被験者がどちらの影響源からの勢力を強く認知しているか直接には比較できない。そこで，今井（1986）の項目設定に従って尺度項目水準での比較を試みた。有意差が認められた項目を見ると，「参照」，「専門」，および「魅力」の3勢力では，父親に比べて母親の影響のほうが強く認知されていることになる。松田（1993）は，小学生から大学生までを対象に自己理想像と親のイメージのずれを調べた。女子の場合には，母親についてこのずれが一貫して小さいことが確認された。松田の結果に基づくと，女子青年は母親に対する同一視傾向が高く，「参照」や「専門」という点での母親の勢力を認めることになる。

Parsons & Bales（1956）は，近代化社会での優勢な家族形式である核家族が社会の中で「専門化した機関」としての役割をもつことを指摘した。彼らは，とりわけ性役割化という点で核家族が重要な機能をもつことを認め，道具性リーダーとしての父親と表出性リーダーとしての母親，それらの2つの性質を家族という場の中でそれぞれ学習する息子と娘という構図を浮き彫りにした。この核家族像は，「男は仕事，女は家庭」という性役割観を継承-強化する役割を果たすことになる。しかしながら，近年，性役割意識の変化や共稼ぎ夫婦の増加に伴い，伝統的な核家族像の揺らぎが指摘されている（柏木，1993；諸井，2003など）。さらに，早60年代に，断片化する労働と管理労働などの非具象的な労働形態の増加によって現代社会では伝統的な父親像が喪失されていることが精神分析的観点から説かれて

いる（Mitscherlich, 1963）。

興味深いことに，古川（1974）は，70年代初頭にリーダーシップ理論の観点から小学生から大学生までの親子関係を検討し，「男は仕事，女は家庭」という伝統的考えに基づく家族機能の歪みを認めている。つまり，子どもは，父親には「情緒的相互作用」の増加を望む一方で，母親には「しつけ・訓練」が過度すぎるという，理想と現実のずれを示した。

これらの論点を踏まえると，本研究での結果は，次のように全体的に解釈できるかもしれない。「参照」，「専門」や，「正当」などの勢力は，父親と母親で別個のものとして機能しており，これは，親子関係を通しての性役割上の伝達という点での Parsons & Bales（1956）の伝統的な考えと一致する。さらに，「参照」や「専門」という側面で母親に対する強い勢力が見られたことは，被験者が女子であることから，同一性という考え（松田，1993）と対応する。ところが，父親と母親それぞれからの「賞・罰」勢力が一体のものとして認知された。伝統的な観点に従えば，子どもに対して父親と母親それぞれが発揮する「賞・罰」は質的に異なるはずである。ところが，本研究の結果は，Mitscherlich（1963）による父親像の衰退・崩壊という考えに対応して，父親や母親が発揮する「賞・罰」機能の質的差異が消失しつつあることを示唆している。つまり，分化していた「賞・罰」に関する親役割が同質化していると思われる。

しかしながら，本研究では女子被験者に限定したこともあり，以上のような解釈は男女被験者による比較分析を通して妥当化すべきであることはいうまでもない。また，父親と母親からの影響認知に関する心理学的構造の検討が中心であったが，このような影響認知が親子関係の他の心理的・行動的特徴にどのような関連をもつかを見ることも重要であろう。

ところで，本研究では，親子関係についていわゆる量的接近を行った。諸井（2004b）は，高校生が親子関係を素材に創作した短歌を「データ」として，親子関係の心情が短歌という凝縮された空間にどのように表出されるかを考察した。短歌とは，「詠み手」に内在する特定の心情を他者（特定化されない場合も含め）に伝える際に「五・七・五・七・七」という制約条件が付加された特殊な言語コミュニケーション形式である。諸井は，短歌という制約された空間の中で高校生が種々の仕方で父親や母親との「絆感覚」の確認行為を行っていることを読みとった。このように，本研究のような量的接近方法にとどまらず，質的手法も併用することにより親子関係に内在する力動的な過程も浮き彫りにすることができる。

最初に述べたように，たとえば「ひきこもり」現象（斎藤，2003）は，本研究での目的にも有益な視点を与えてくれる。親からの影響認知の問題は，親と子という微視的なシステムにとどまらず，現代家族の変容という巨視的な視座をもちながら，なおかつ量的および質的方法を併用しながら接近すべきといえよう。

〈付記〉

(1) 本研究は，杉本彩加さん（同志社女子大学・現代社会学部・社会システム学科2003年度卒業生）が筆者の下で取り組んだ卒業研究に由来する。卒業研究で彼女が示した熱意がここでの成果を生み出した。

(2) 本研究の分析は，同志社女子大学・学術研究推進センター2004年度研究助成金（「現代青年における親子関係認知の基本的構造」）に基づいて行われた。

(3) 「社会的勢力」に関する訳語については，本研究では今井（1999）に従った。

(4) データの統計的解析にあたって，*SPSS13.0J for Windows* を利用した。

(5) E-Mail: kmoroi@dwc.doshisha.ac.jp

V．引用文献

Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss, vol. 1: Attachment.* London: Hogarth. 黒田実郎・大羽泰・岡田洋子訳『母子関係の理論Ⅰ－愛着行動－』1976 岩崎学術出版社

French, J. R. P & Raven, B. 1960 社会的勢力の基礎 D. Cartwright & A. Zander（Eds.）*Group dynamics: Research and theory.* TAVISTOCK PUBLICATIONS. 三隅二不二・佐々木薫（訳編）『グループ・ダイナミックスⅡ〔第二版〕』1970 誠信書房 727-748頁

古川綾子 1974 両親のリーダーシップ行動認知に関する発達心理学的研究－子どもからみた理想像と現実像の変化について－ 教育心理学研究，**22**，69-79.

今井芳昭 1986 親子関係における社会的勢力の基盤 社会心理学研究，**1**，35-41.

今井芳昭 1999 社会的勢力 中島義明他（編）『心理学辞典』有斐閣 372頁

柏木惠子 1993 “父親の心理学”の社会文化的背景－家族・親役割の変化，女性・母性の変貌－ 柏木惠子（編）『父親の発達心理学－父性の現在とその周辺－』川島書

店 29-60頁
松田 惺 1993 父親の子どもの発達への影響 柏木惠子(編)『父親の発達心理学－父性の現在とその周辺－』川島書店 267-307頁
Mitscherlich, A. 1963 *Auf dem Weg zur vaterlosen Gesellschaft. Ideen zur Sozialpsychologie.* R. Piper & Co. Verlag. 小見山実(訳)『父親なき社会－社会心理学的思考－』1972 新泉社
諸井克英 2002 彷徨する親子関係 和田実・諸井克英著『青年心理学への誘い－漂流する若者たち－』ナカニシヤ出版 45-66頁
諸井克英 2003『夫婦関係学への誘い－揺れ動く夫婦関係－』ナカニシヤ出版
諸井克英 2004a 若者の対人環境管理に関する社会心理学的研究(6)－親との関係経験が恋愛観におよぼす影響－同志社女子大学学術研究年報, **55**, 129-143.
諸井克英 2004b 凝縮された空間に溢れる親子関係 同志社女子大学編『ピクルスの気持ち－高校生短歌のこゝろ－』晃洋書房 187-205頁
内閣府政策統括官(総合企画調整担当)編 2001『日本の青少年の生活と意識 第2回調査－青少年の生活と意識に関する基本調査報告書－』財務省印刷局
小野寺敦子 1993 日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究 心理学研究, **64**, 147-152.
長田雅喜 1987 日本の社会構造と家族関係 長田雅喜(編)『家族関係の社会心理学』福村出版 200-212頁
Parsons, T., & Bales, R. (Eds.) 1956 *Family: Socialization and interaction process.* Routledge and Kegan Paul. 橋爪貞雄他(共訳)『核家族と子どもの社会化』1970 黎明書房
斎藤 環 2003『ひきこもり文化論』紀伊國屋書店
山田昌弘 2004 家族の個人化 社会学評論, **54**, 341-354.